Japanese Association for Religious Studies

される קרב の語根は、קרב で、それは神に自身を「接近させる、近づける」（nähern, nahen）ことを意味する。つまり犠牲は関係概念であり、一方が離隔している時に、他方を近づけることや、一方に近づくことを意味する。そこから犠牲の本来の意味は、遙か遠くに存在するもの同士が近づくことである。ブーバーが קרבן を「そこへの接近」（Darnahung）と訳した意図はそこにある。最後に「会見の幕屋」（אהל-מועד）とは、荒野を放浪する際の、持ち運び可能な神の聖所である。אהל はテントや幕屋のことで、今まで様々に訳されてきた。七十人訳聖書では「証しの幕屋」、ルターでは「教団の小屋」（Stiftshütte）、Kautzsch-Bertholet 訳では「啓示の幕屋」（Offenbarungszelt）と訳されたが、どれも意味を適切に表現したとは言い難く、ヴルガータの「契約の幕屋」が辛うじて正しい。מועד を構成している語根の יעד は、カル系で「会議を手配する」「誰かとどこかで合う約束をする」などの意味があり、正確には「あらかじめ定められた場所で、出会うべくして現れる」ことを指している。つまりこの幕屋は神の臨在がはっきり目の前に思い浮かび、神に謁見できる場である。そこからブーバーは「出会いの幕屋」（Zelt der Begegnung）と訳出した。

預言者が、言葉を媒介として神の啓示を預かり、それを民に告知する仲介者であるならば、祭司は、礼拝を執行し、神へと犠牲や供物を献げる役割を担う。祭司はこのような具体的な供犠や祭儀を司ることを通した「神―民」関係の仲介者である。それぞれの祭儀規定は、原語の語根まで辿ると、それは神と民との関係を示す概念によって表現されている。ブーバーは、ヘブライ語聖書の独語訳に際して、ヘブライ語が持つその本来の「語義」を際立たせ、馴れ親しんだドイツ語を用いず、原語が持つ意味を残した訳語を考案したのである。

「生の宗教」の出現
――ジンメル『宗教』の改訂をめぐって――

深澤英隆

ゲオルク・ジンメル（一八五八―一九一八）の宗教論の代表作である『宗教』（*Die Religion*）は一九〇六年に初版が、一九一二年に大幅に改訂増補された第二版が出ている。この改訂版において、ある種の「生の宗教」とでも呼ぶべきジンメルの宗教ヴィジョンが、明瞭に姿を現す。

ジンメルのこの生の宗教の立場には、①生の宗教の方法論、②生の宗教の超越論的生成論、③生の宗教の存在論、の三つのアスペクトが見分けられる。

①の領域においては、ジンメルはP・バーガーのいわゆる「方法的無神論」に近い立場をとるとともに、宗教の真偽問題のポストとも言うべき地点を探っているようにも見える。

②の領域においては、宗教を「宗教性」（Religiosität）という主観性のアプリオリな領域の解明を通じて基礎づけようとの関心が明らかである。この際にジンメルの議論の特徴をなしているのは、宗教的な経験カテゴリーが結合する経験内容自体が、すでに先行的に宗教的カテゴリーによって規定されている

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

との考え方である。ジンメルは、とりわけ三つの経験領域、すなわち、自然経験、運命の経験、そして社会の経験を、宗教を生ぜしめる経験領域として挙げる。ジンメルのこの議論においては、そのアプリオリを特定するジンメルの直観そのものが、既存の宗教、とりわけキリスト教に由来しており、一種の循環論になっていることは否定できない。

③の領域は、生の、あるいは宗教性の存在論とでも呼ぶべき主題領域である。ジンメルは、信仰をもつことや宗教的であることとは、命題的ななにかの真理性を信じること（Fürwahrhalten）ではなく、存在（Sein）のありかたであり、ある状態（Zustand）ないし「状態性（Zuständlichkeit）」であると言う。そうした状態性が受肉する宗教的表象や内容はさまざまでありうる。しかしジンメルにとって重要だったのは、こうした宗教的生のありかたの底に溢れるある種の直接的な生である。それは「この一性、なおまったく他在を知らない宗教的存在の、それ自身に没頭する状態性」である。ジンメルは、こうした状態性を極限概念として、しかし同時に生きるなかで直観しうる事実性として措定した。さらに注意すべきは、この直接的宗教性が生きられることにこそ、ジンメルは宗教の発展の方向を見ている点である。ジンメルは、同時代の宗教進化論を、自己の信仰を絶対化する過ちとして批判する。ジンメルの言い方で言えば、「より完全な宗教」というものは無く、「より完全に宗教」であることが、唯一語りうる宗教の「進化」である。これはジンメルによれば、「最も純粋な意味において現実に（wirklich）宗教となる無限のプロセス」に他ならない。ここにはすでに、自らが生み出した形式を絶えずはみ出しながら展開される生の自己超越の運動というジンメルの生の哲学の枠組みが、またそうした枠組みに基づく「生の宗教」ともいうべき宗教のヴィジョンが垣間見えると言えよう。

ジンメルの生の宗教のヴィジョンは、一九一二年以降に成立した諸著作において、さらに詳しく論じられるが、この生の宗教が具体的にどのような様相をとるのか、ということは、最後まで明確にはならなかった。ジンメルの宗教論には、決定不可能なさまざまな両義性がつきまとっている。しかし、そうした両義性を、宗教がある未決定なものとして主題となった近代という時代の特質を如実に反映したものであると考えるならば、ジンメル宗教論は、より積極的な今日的意味をもつものとして見えて来るであろう。

ハンナ・アーレントの『人間の条件』再考
――世界への愛――

今出敏彦

ハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906–1975）は『全体主義の起源』で一躍有名になったユダヤ人思想家である。彼女の独自性は、公共性概念の形成において、一方で古代ギリシア・ポリス的な「不死への努力」をモデルとし、他方、キリスト教思想の「永遠の命」によって基礎づけられていることであるが、これらは共に、いつかは死ぬ運命の人間にとって究極目標である。では、そのどちらがより究極だろうか？　この問い

NII-Electronic Library Service